Classics of Philosophy in Japan 4

西田幾多郎

思索と体験

PUBLISHED BY Chisokudō Publications
Nagoya, Japan

http://ChisokudoPublications.com

SERIES Classics of Philosophy in Japan, 4

© Chisokudō Publications, 2016, 2021

COVER DESIGN Claudio Bado

ISBN 979-8377207382

JAPANESE TEXT

The interlinear numbers in the text refer to the pagination in the original and new editions of Nishida Kitarō's Complete Works:

Original edition (pagination in italic type)

「思索と体験」『西田幾多郎全集』岩波書店、1975 年、1: 201–426.

New edition (pagination in regular type)

「思索と体験」『西田幾多郎全集』岩波書店、2003 年、1: 161–337.

目次

思索と体験

三訂版の序……1
増訂版の序……3
序……4
認識論に於ける純論理派の主張に就て……7
法則……27
論理の理解と数理の理解……38
自然科学と歴史学解……52
高橋（里美）文学士の拙著『善の研究』に対する批評に答う……75
ベルグソンの哲学的方法論……88

ベルグソンの純粋持続……96
現代の哲学……101
コーヘンの純粋意識……127
ロッツェの形而上学……132
認識論者としてのアンリ・ポアンカレ……149
トルストイについて……153
愚禿親鸞……157
『小泉八雲伝』の序……159
『国文学史講話』の序……162
『物質と記憶』の序文……168

三訂版の序

[163][207]此書は大正十一年の増訂版以来十有余年の歳月を閲して、今度又版を新にすることとなった。私は此機会に前に除去した「認識論者としてのアンリ・ポアンカレ」を再び此書の中に収めることとした。ポアンカレはやはり私には棄て難い人である。

何十年の後此書を読み返して見るに、リッケルトやベルグソンなどの思想の要点を述べたものは兎に角として、多少とも私の立場から私の考を述べ、又それからリッケルトなどに対して云って居る所は極めて幼稚にして膚浅なるを恥じざるを得ない。当為とか意味とかいうものを純粋経験の自発自展の事実に帰する如きは、或はリッケルトなどの所論を理解していないのではないかとも考えられるであらう。又それは単に粗笨なる心理主義ではないかとも云われるであらう。併し純粋経験の自発自展というのは、「善の研究」に於て論じた所が基となって居るのであって、当時の考が心理主義と云わるれば、それも致方ないが、私の考は単にそれだけのものではなかった。「善の研究」に於ての純粋経験の自発自展という考にも、私には最初からヘーゲルの所謂具体的概念の発展の考が、その根抵に含[208]まれていたのである。真に自発自展的な純粋経験とは、存在と当為との単なる抽象的対立を越え、之を自己自身の内的分裂として自発自展的に進み行く動的一般者という如きものでなければならないと考えていた。無論、経験を然考えることが、この書の論文に於て、多少とも成功して居るなどと云うのではない。唯、私の意図が斯くあったと語るのみである。[164]

此書の論文を書いたのは、私が京都に来た始の頃であって、主として私の習得時代であった。私は一度もカント的な認識論者となったことはないが、当時は甚く新カント派の人々から動かされた。その頃は此等の学派がドイツ哲学界の主潮であ

り、従って又我国の哲学界の主潮でもあった。私は今此書を読み返すにつれて、深く歴史の動きというものを思わざるを得ない。

昭和十二年十二月

西田幾多郎

増訂版の序

私[165]は此の版に於て「認識論者としてのアンリ・ポアンカレ」と「物質と記憶の序」との二つを除いて[205]、「現代の哲学」「コーヘンの純粋意識」「ロッツェの形而上学」の三つを加えた。私は此書を私の「自覚に於ける直観と反省」を読む人々の参考に供えたいと思う。此の版を改めるに就ても、無精なる私はすべてを務台文学士に一任した。

大正十一年八月

西田幾多郎

序

[166] 此[203]の書は、最後の一篇を除いては、悉く余が京都に来てから書いたものを集めたのである。「思索と体験」と題したのは単に余が思索したもの、体験したものという意に過ぎない。京都に来たはじめ、余の思想を動かしたものはリッケルトなどの所謂純論理派の主張とベルグソンの純粋持続の説とであった。後者は之と同感することによって、前者は之から反省を得ることによって、共に多大の利益を得た。併し余はベルグソンをその儘に信ずるものでもなければ、またリッケルトの所論を犯し難しと考えるものでもない、現今哲学の要求は寧ろ此等の思想の総合にあるのではないかと思う。

二三年前に書いたものでも、今度出版することとなって、読み返して見ると、いずれも不満足の所が多い。特に第一の論文の中に、カントやリッケルトなどを批評するあたりは我ながらその粗笨なるを恥じざるを得ない。唯その立脚地に於ては、今も当時も変りがないと思うからその優に出版することとした。第四の「自然科学と歴史学」に於て論じた所は余の決定せる意見を述べたのではない。試にウィンデルバントやリッケルトの考えに基いて論じて見たのである。唯、余は之によって自然科学的[204]方法が唯一の科学的方法であるかの様に考えて居る人々に反省の機会を与えたいと思うのである。この論文については、或歴史家から、余の論ずる所は現在の歴史研究の真相を穿ったものでないとか、又此の如き議論は歴史の研究を個々の事実にのみ導く弊を伴うとかと云われた。併し元来この論文は歴史と名[167]のついたものを穿鑿して帰納的に論結したのではない。自然科学と立場を異にする歴史学というものは、認識論上此の如き性質のものでなければならないと云ったのである。

余の所論が歴史の研究を個々の事実にのみ導く弊を伴うことがあるとしても、そは余の本意ではない。余の個性というのは個々の事実を意味するのではない、却って個々の事実は必ずしも歴史に必要がないと論じた積りである。

大正三年十二月

西田幾多郎